
ミルドタウン

akuhoshi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミルドタウン

【Nコード】

N7105Y

【作者名】

akuhoshi

【あらすじ】

記憶喪失者だけが住むことのできる街、ミルドタウン。

四年前、ミルドタウンにうつり住み、探偵となったミモリ。

西地区の倉庫街で少女とすれ違った次の朝、アパートの壁に赤いペンキでラクガキがみつかった。

『Where do your pains come from
? DA』

その言葉の意味するところとは？

p i x i v と同時掲載です

種別を間違えたので再投稿しました。すみません

ミルドタウン

1

夜の道に、月の光をきらきらと反射させる、ハーブキャンディの銀色の包み紙が、等間隔に、点々と落ちていく。

ミルドタウン、南西部の倉庫街。

港から遠い奇数番の倉庫のほとんどは、使用されていないか、使途不明の荷物が運び込まれたままになっている。一万人弱の生活を支えるために必要な物資が少ないのか、それとも、誰かが使い途を忘れてしまったのだろう。しまいこまれたままの荷物だって、自分の使い途など、思い出そうとしても思いだせないはずだ。この街の住人たちと同じだ。

キャンディの道の端っこは僕の足もとに続いていく。「やあ、こんにちば」コートのポケットに手を突っこんだら、底にあいた穴から指がでた。ポケットの中で逆立ちをしている、口のあいたキャンディの大袋を、正しい位置に戻す。

それから落としたキャンディをひとつずつ拾いあげる。

まるでお菓子に誘われたヘンゼルとグレーテル。道しるべの白い小石よ、かわいそうなふたりを、あたにかいお家まで連れ帰ってくれ。

そのままにして帰るという選択肢に心ひかれたけれど、残念ながら倉庫街の掃除係とは顔見知りであるし、そもそもこんなまずいキャンディ（しかも大袋）のために、嗜好品用の交換券を差し出そう、というのは、世界じゅう探しても僕だけだろうから、いずれ僕が犯人だとわかってしまう。

それはとても気まずいことだ。

保安官のバルに呼び出された僕が、保安官事務所に呼び出されてしょぼくれているところを想像すると、凍った頬が笑みの形になった。

吐く息が白い。

ミルドタウンの冬はとても寒い。

それは、街の緯度の高さの関係している。あと、海の近さだ。最後のキャンディを拾い終えた頃、僕は帰りの路面電車の心配をしていた。時計回りの路線とちがい、反時計回りは気が短い。

電車が僕を置いて出発してしまわないうちに、さあ、行こう。その場に背をむけると、腰のあたりに何かが軽くぶつかった。

「ごめんなさい」

小さな女の子だった。

「大丈夫？」

彼女は僕の顔を見ると、とても驚いたような表情をした。

アジア系の顔立ち。つぶらな瞳よりも、ピンク色のセーターと、サンダルという、ちぐはぐな格好が印象的だ。

「待って、お菓子をあげよう」と、咄嗟に声をかける。「キャンディをあげるよ」

彼女の小さな手を握り、銀色の包みを手渡す。

その声かけがかえって不審がらせてしまったようだ。彼女は顔を覚える前に、僕を突き飛ばすように、走り去って行ってしまった。

街のほうにはまだ明かりがあった。彼女はその明かりの先に消えた。

周囲をきちんと確かめたが、彼女の保護者となるような人の姿は、どこにもないし、気配も感じられなかった。

追いかけるべきだと思った。思ったけれど、やめた。

正確には、やめておいた方がいい気がした。

こういうときは、勘にしたがう。僕は探偵だが、推理よりも、勘のほうが優秀な探偵だ。それに、運動音痴だから、追いつかないだろう。

彼女のことは保留にして、反時計回りの路面電車乗り場に急いだ。

ミルドタウンは周囲を海に囲まれた円形の街だ。

住民の数は、公式には十万とされているが、通りを歩く人の量や、空きアパートの数を考えると、一万人に達していないのではないか、というのが本音のところだ。

ここは、東アジアを主な舞台とする泥沼の戦争や、世界的な不況など、憂鬱なニュースから逃れるために、金持ちたちによってつくられた閉鎖型コミュニケーションとは少し毛色が違っている。

街の人たちは、ずっとこの街で暮らしている。

外の世界を知らないせいか、変わりものが多い。

外の世界に興味がないから、本だって、あまり読まない。

港はあるものの、船をみたことがない。

ミルドタウンの外部とのやりとりは、海上の中継ポイントを介して行われるからだ。

この街に移り住んだとき、僕はしわひとつない、ぴんとしたシャツと、すてきな茶のジャケットを着た、どちらかというと温室育ちの十四歳だった。

なによりも、僕はハーブキャンディが好きだった。

この街で、ハーブキャンディを手に入れるには、ちよつと骨が折れる。

ミルドタウンでは、交換券とよばれる代替通貨を採用している。

食料や日用品は、ごく当たり前に支給される通常の交換券で事足りるのだが、キャンディは嗜好品用の交換券を使わなければならない、しかもそれは、年間の絶対量が決まっていて、追加で買うことは認められていない。

そんなわけで、この世間しらずな少年は仕事を必要としていたのだ。

町役場でそれを斡旋してもらったとき、《探偵》という職業があることに僕はとても驚いたし、感謝もした。探偵に年齢は関係ないし、それに街の住民は価値のある個人的な資産を持たないので、報酬はたいてい嗜好品の交換券で支払われることになった。

僕はハーブキャンディと引き換えに探偵になった。

まあ、それは冗談だけれど、事実としてはそういうことになる。

僕はやむを得ず探偵になり、そして、普通の住民よりもたくさんのハーブキャンディを手に入れることができる。

僕はマグカップにコーヒーの粉末を入れ、ストーブ（備えつけのもの）からやかんを下ろし、注いでスプーンで混ぜ、さらに湯を足して、コーヒーを作った。

仕事をはじめてからずっと暮らしているアパートは、街の西側にあった。

架線沿いにあるこの建物は古くて、あまり手入れも行き届かず、路面電車が通るたびに、外側に取りつけられた非常階段が危なっかしい悲鳴を上げている。

他の場所をみつけて、引越さないでいるのは、部屋の本棚に詰め込まれた本の量が知らない内に致命的な量になってしまっていて、全部を移動させるのが大変そうだからだ。家具と家電だけなら、少し大きな旅行鞆を用意するだけで、僕はどこにでも行けそうなのだけれど。

キッチンには、郵便屋がついでに届けてくれた僕あての手紙が広げている。

この街の郵便屋は、どちらかというと何でも屋の運送業、といった趣で、バイクで運べるあまり重たくないものはだいたいなんでも運んでくる。

そして探偵に手紙を届けるのが、彼の何よりの誇りのようでもある。いつも胸をはって、手紙には染みひとつつけていないこと、それから仕事があれば、お気軽に、またいつでもどうぞ、代金はサービスですと伝えてくれる。

それから、今日の届け主はきつと恥ずかしがり屋のあなたのファンに違いありません、とつけ足してウィンクするのを忘れない。ようするに手紙は事務所のドアのすきまから滑りこませるか何かして、直接届けられ、送り主は匿名で、朝一番に僕のところまで届けにきた、ということである。そういうふうに依頼が届くことは、じつは少なくない。

あの気のいい青年が、「探偵に手紙を届ける郵便屋」という自分の役割を演じるのに夢中で、手紙や依頼の内容をせんさくしたりしない、ということは、街のみんなが知っているのだ。

今日の手紙には、ふるえた筆致で、ただひと言、こう書かれていた。

『Who are you?』

たどたどしい言葉の連なりが、僕に昨日の女の子を思い出させた。ピンク色のセーターから突き出た手足は、この文字のようにか細かった。

僕は誰？

それはとても答えにくい質問だ。

だから、わかりやすいところからはじめよう。

四年前、僕はこの街に来た。探偵をしている。名前はミモリ。

住んでいるアパートは街の西側にあり、東側にはない。

好きなものはハーブキャンディ。朝食にはコーヒーをのみ、ビスケットを二枚食べる。今日は、目玉焼きをつけてもいい気分だ。フライパンを探していると、部屋の外から話し声が聴こえてくることに気がついた。

僕の部屋は、非常階段にちかい角部屋だ。

住民がわざわざ僕の部屋の前で立ち話をするっていうのは、めずらしい。

マグカップと、ビスケットを崩れないようにそっと持ち、ドアのキイを外して押し開ける。

しん、と話し声が静かになった。

ドアの外に、たぶん、アパートの住人たちがあつまっていた。ほとんど全員じゃないだろうか。

気のせいでなければ、みんな、同情的な瞳をこちらに向けている。彼らが集まっていたのは、正確には、扉の横。壁の前だった。

「やられたね、ミモリ。たちの悪いいたずらだ」

と、集まったうちのひとりが言い、僕の肩を叩いてきた。

部屋から出て、みんなの横に並び、自分の部屋の扉の横の壁をながめた。

『Where do your pains come from
? DA』

赤いペンキでべつとりと、そう書かれている。

ためしに触ってみたが、ペンキは乾いていた。

「どういう意味だい？」

と、先ほどの彼が気の毒そうに声をかけてくる。

僕は首を横にふり、お決まりの文句を口にした。

「さあ、覚えていない」

それは冗談でもあり、いろんな物事を納得するに足りる唯一の説明でもあったので、住人たちは納得して、三々五々、自宅へ、職場へと去って行った。

ここはミルドタウンだ。

街の人たちは、少し変わりものが多い。

本はあまり読まない。

船をみたことがない。

そして、みんな記憶喪失者だ。

ミルドタウンの主な交通機関は、路面電車だ。僕もこれをよく利用する。渋い緑色のふたり掛けの席にひとりで座るとき、とても懐かしい気持ちになる。

街はとてもきれいに整理されており、工場や倉庫街は西側に集まっている。工場は無人化されたシステムで管理されていて、実際に働く人間はわずかで良い。それ以外の、住民たちが住んでいる東側それから町役場など公の施設がある南側は、欧州の街並という街並を平均化して、それをまねたような案配だ。結果として、空の色と相まってどこもかしこも灰色で特徴のない街並、という出来栄えとなっている。散歩中に迷子になることがよくある。

時計まわりの路線は、街の中央にあるセントルム病院の前から伸びる道で途切れている。西側に行く人たちは少ないし、北側は森と山なので、もっと少ないためだ。

運賃をお決まりの代替通貨で支払い、ステップをおりてから、目的のコーヒーショップまで十分くらい歩く必要があった。

湿ったアスファルトの上を歩くのは、悪い気はしない。とくに道路の真ん中を歩いていても怒られないシチュエーションの散歩は大歓迎だ。この街で車をもっている人は少ない。バスの本数も少ない。そうそう轢かれないだろう。

角の洋品店を目印に路地を曲がると「SEVENTH」の看板がみえた。

セブンスは、雑居ビルの一階にへばりつくようにして存在するコーヒーショップだ。兎の寝床のような店内に、カウンターぎわの丸椅子が六つ、路面側にふたつ、テーブル席がある。硝子窓はいつも

曇っていて、コーヒーカップの白いソーサの三つに二つは罅割れが入っている。

マスターは頭にバンダナを巻いた髭を生やした中年の男の人だ。どんなにドアベルを派手にならして店に入ったとしても、このマスターはまちがいにカウンスターの脇に置いた小さなテレビをみているか、それともラジオをきいている。今日は、テレビの定期ニュースをながめていた。

「……昨日未明、中央病院で火事があり死傷者が多数でた模様……放火の疑いもあるとみて、市民に注意をうながしています……」

そのような原稿を、男性アナウンサーの合成音声を読みあげた。「大事件だね」と声をかけると、マスターは重々しく頷いた。

店には先客がいた。

どちらも常連客だが、テーブル席にふたりいて、カウンター席についた白金の髪の少年と何ごとか話している。話しているというか、口喧嘩に近い。

「注文は？」とマスター。

僕はポケットから、クリップ（書類用のやつ）でとめた交換券の束を取り出し、二枚、カウンターに置いた。

「コーヒーを。一枚は、ギーのぶん」

「あんな大ばら吹きに奢ってやることないさ」

すると、それを聞きつけた客が、こちらを睨みつけた。少年のほうだ。

名前はギー。僕は彼のことをよく知っている。

「誰が大ばら吹きだった？ よけいなことをいうな」

「だって、お前、そんな小さななりじゃあな……誰も信じやしないさ」

ギーは、手や足や体のつくりがほっそりとしていて、とくにその白金の髪はまるで絹糸のようだし、指先と横顔はモデルみたいだ。何よりも、彼は僕と同じ年だった。

「ふざけるな。俺は本当に軍属だったんだぞ」

テーブル席の客が苦笑いを浮かべた。

マスターはカウンターの内側でにやにや笑いを浮かべている。

ギーは一年前にこの街にきた。新しい住人だ。

この街に來ると外の記録には許可が無い限りあまり触れられなくなるから、確かめようがないのだが、彼はミルドタウンの外にいたときは軍人だった。

長びいた戦争は、世界から一定の年齢の若者の人口をうばい、結果として少年兵は一般的なものとなっている。

だが、セブンスの客たちはそんなことは知ったこっちゃないし、暇つぶしを探しているの、ぱっと見喧嘩の弱そうなギーはいつも標的になる。

「僕は戦争に行ったことがないけど、ギーの話はほんとうだと思っ
よ」

「ミモリ」と、ギーが苦虫をかみ潰したような顔する。

客たちは僕をみて、あわれむような、変な顔を浮かべた。

僕は、無視して続けた。

「サイバネティクスを応用した自由変形素材や、自律型可変式武器が開発されて、前線の兵士の負担は僕たちが思うよりもずっと減ったんだ。たとえば子どもでも、知識さえあれば、十分な仕事をさせることができるんだ」

「もうやめろよ、変に思われるぜ」

「構わないよ」

ギーは「やれやれ、まったく」というようなスラングを口にして溜息を吐いた。

僕は、余計なことを言ったことに気がつき、恥ずかしくなった。

一年前はまだギーも本気だったかもしれないが、近頃では、観察していると、子供をあやすような、彼なりの諦めの感情が含まれていることがわかる。それが住人たちのコミュニケーションなのだと、段々わかってきたのだ。それと、住民たちがギーをなかなか認めようとしなのは、軍属だったかどうかということの真偽ではなく、

ギーに染みついている外の世界の空気のせいだということも。

店主はうすいコーヒーを二杯もってきた。

ギーはそれに遠慮なく口をつけた。

「みんな、きみがうらやましいんだ」

「いいね、いいジョークだ」

ギーが笑ってくれたので、僕はほっとした。

彼がミルドタウンを離れば、僕は寂しいだろう。

「おはよう、ギー」

「おはよう、相棒」

「さっそくだけど、相談したいことがあるんだ、いろいろと」

ギーは申し訳なさそうな顔をした。

「そのつもりだったなら本当に悪いんだけど、今日は先約があるんだ。夜に話を聞くよ」

うながされて窓の外に目をやった。革製のジャンパーを着た大柄な男が、そこに立って煙草をふかしていた。

「仕方がないね」

「本当に、話を聞くよ、ミモリ」

「ああ、うん……」

「だから、その話は取っておいてくれ」

僕が曖昧に頷き、彼が大男と行ってしまうと、客たちは納得できない、という表情をそれぞれの顔に浮かべた。

*

セブンスの外に、煙草の吸殻が落ちていた。クラクションが鳴り、ふり返ると赤いランプをくつつけた保安官事務所の車がとまっていた。窓があき、保安官のバルガドが片手を大きく上げて合図を示してきた。

「ふられたのかい」と、大きな声で言う。

「残念ながら……」

「ギーを連れてったあいつは西ブロックのちんぴらだ。付き合っにはあまりよろしくない手合いだな。まあ、ギーのことだ、うまくやるだろう」

僕も、ギーのことは心配していない。僕が探偵であるように、ギ―もまた彼なりの仕事をする。機械いじりが好きらしく、そういう仕事がしたいと言っていたが、いまは頼まれれば何でもやっているようだ。彼を頼ってくるのは、どちらかというと、街のつまはじきものが多かった。

「保安官、病院で火事があったって聞きましたけど」
バルはめずらしく疲れた表情を浮かべた。

「ああ、昨日は消火活動の手伝い、今日の午後からは関係者に話を聞きにいかなくちゃならん。おまけに、西ブロックで死体が見つかった」

「死体？ 物騒ですね」

「気になるなら保安官事務所にいってくれ。リドが相手をする」

「ありがとうございます。ちょうど、寄って行こうと思っていたんです。必ず行きます」

これから病院に行くというバルと別れ、僕は保安官事務所へと足を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7105y/>

ミルドタウン

2011年11月21日11時35分発行